

**自然を生かしたまちづくり
只見町長、教育長が
栃木県那須町を訪問**



▲平山町長(中)と有意義な懇談となりました

渡部町長と渡部教育長は、5月18日にゴウウツツジ群落や那須連山などが有名な栃木県那須町を訪問し、平山幸宏町長と懇談をしました。
懇談では、自然を生かしたまちづくりや今後の交流について、意見や情報交換が行われました。
また懇談終了後には、平山町長にご案内いただき、那須町の視察を行いました。

**狩猟の在り方を考える
「マタギサミット」開催**



▲講師を務めた田口教授

「ブナ林と狩人の会…マタギサミット in ただみ」が6月24日、25日に行われました。初日は講演とパネルディスカッションが行われ、全国の猟友会関係者や文化研究者など約200人が参加しました。
講演では、東北芸術工科大学教授の田口洋美氏が地域ごとの旅マタギの特徴などに触れ、会津を訪れていたことについて解説しました。
2日目は、秋田マタギの通行した記録が残る叶津番所などを視察し、旅マタギと只見町のつながりを改めて確認しました。
詳細につきましては、来月号で紹介いたします。

**地域の新たな防災拠点に
消防署口只見出張所
安全祈願祭**



▲安全祈願する関係者

南会津地方広域消防本部・消防署只見出張所の新庁舎建設工事の安全祈願祭が21日に、長浜宇川除地内の建設現場で行われました。
庁舎は鉄骨造り2階建てで、工期は来年3月を予定しています。
安全祈願祭では、施主の南会津地方広域市町村圏組合の星學管理者が鉄入れを行い、安全を祈願しました。
祈願終了後には、施行者を代表して南会津西部建設コーポレーションの大瀧取締役が挨拶をしました。
工事期間中は、建設車両等の往来などご迷惑をおかけしますが、ご理解のほどお願いします。

**貴重な文化遺産を守る
あがりこ型樹形の
巨木のナラ枯れ防除実施**



▲幹に薬液を注入する様子

只見町ブナセンターは、梁取地区の観察の森に生育する「あがりこ型樹形」のコナラ・ミズナラの巨木を「ナラ枯れ」から守るため、幹に殺菌剤を注入するナラ枯れ防除作業を6月12日に実施しました。
「ナラ枯れ」は「カシノナガキクイムシ」が媒介する「ナラ菌」によりナラの木が枯れてしまう伝染病です。
「あがりこ型樹形」は東北地方でかつて新材を生産するために雪上で樹木を伐採した結果出来上がった独特の樹形を言い、只見町ではモギリツキなどと呼ばれます。これらを持続可能な森林資源の利活用を伝える文化遺産として保護・保全を図っています。

令和5年度

「自然首都・只見」学術調査研究助成金事業の 助成テーマ・研究者グループが決定！

「自然首都・只見」学術調査研究助成金事業は、只見町の自然環境・生物多様性、歴史、民俗、産業に関する調査研究をおこなう研究者に対して助成し、それらの価値を科学的にあきらかにすることで「自然首都・只見」ブランドの向上をめざすものです。審査の結果、今年度は下記の5件について助成を行うことが決定しました。

No.	研究テーマ	助成研究者代表	所属
1	アカミノアブラチャンの遺伝的特徴の解明と増殖技術の確立	森口 喜成	新潟大学 農学部
2	只見町における一般家庭の薪エネルギー活用の経済効果とCO ₂ 削減効果の評価	大橋慎太郎	新潟大学 農学部
3	環境DNAメタバーコーディング解析で読み解く只見町の魚類多様性	村上 弘章	東北大学大学院 農学研究科
4	只見町の民具における使用木材種の体系化と利用	井田 秀行	信州大学 教育学部
5	モザイク植生は動物進化のゆりかご：只見町固有陸産貝類を例とした実証	石井 康人	東北大学 理学部

なお、助成研究者は、只見町ブナセンターと連携して調査研究をおこないます。町内で只見町ブナセンターの腕章・ロゴを付けた研究者や車両を見かけましたら、本事業による調査中ですので、皆様のご理解とご協力をお願いいたします。年度内には研究成果発表会を開催する予定です。



▲ 助成研究者がつける只見町ブナセンターの腕章(左)とステッカー(右)

お問合せ

只見町役場交流推進課ユネスコエコパーク推進係
0241-82-5963



只見町の古民家調査に関する論文が 国際科学雑誌で発表されました！

2015年から2021年にかけて、信州大学教育学部の井田秀行教授らが只見町の古民家に関する調査研究を進めていました。この度、その成果をまとめた論文が、国際科学雑誌「Ecological Research誌」で発表されました。只見町の古民家を通じた人と自然との関わりについての科学的な知見が国内外に広く発信されています。

■論文のタイトル：

「Optimizing species selection for the structural timbers of traditional farmhouses in a snowy rural area of northeastern Japan (東北地方の豪雪農村地域における古民家の構造材の最適な樹種選択)」

■著者：井田秀行・佐藤拓真・陸川雄太・阿部伶奈・梅干野成央・土本俊和

■論文要旨：

地域の木材を利用して建てられた伝統民家には、森林資源の利用に関する情報が含まれている。本研究では、伝統農家建築(古民家)に木材がどのように利用されていたかを明らかにするため、豪雪地帯である只見町において、1845年から1940年頃までに建てられた11棟の古民家の部材の木材種を同定し、また、住民70世帯から聞き取りを行った。調査した2004部材(1棟あたり99-308部材)、合計材積171.2m³(1828部材)からは、計14種が特定された。このうち、スギとキタゴヨウがそれぞれ材積で44%、39%を占めた。ブナは3番目に多く(7%)、屋根を支える扱首(サス)、梁、桁に用いられていた。聞き取り調査の結果、木材は距離1km以内の私有林や共有林から調達され、地元の職人によって伐採、搬出、運搬されていた。たびたび生じる雪崩によって特徴づけられる只見町特有の複雑な植生を考慮すると、地域の高木やその林で、最も入手しやすい樹種はスギであり(ただし自生か植栽由来かは不明)、次に、集落周辺の山の尾根に自生するキタゴヨウであったと思われる。一方、十分な量の木材を供給できるブナ林は限られていたと考えられる。以上から、只見町では雪深い厳しい環境にもかかわらず、歴史的に地元で入手可能な高木が材木として選択されていたと結論づけられる。



▲ 発表された論文

論文はこちらのQRコードから
ご覧いただけます。

